

# 150時間で初級を終える

## －チェンマイ大学での取り組み初年度の考察－

三登由利子、Walaiporn Kanjanakaroon

(原稿受理日 2004年4月16日)

### はじめに

チェンマイ大学では、2003年度の1年次のカリキュラムを見直し、それまで1年半かけて行っていた「初級」つまり日本語能力試験3級の範囲の授業を1年で終わらせることにした。時間数で言うと、以前は3学期195時間だったのが、2学期150時間に短縮されたことになる。この初級のクラスは、主専攻も副専攻等<sup>(1)</sup>も同じ教科書、同じスケジュールで授業が進められ、同じテストを行って同じ基準で成績がつけられた。

1年間の授業を終えた時点の到達度をはかるために、2学期の最終授業時に日本語能力試験3級の問題を使って、文法読解と文字語彙のレベルをチェックした<sup>(2)</sup>。その結果、主専攻の学生の平均正答率は、文法読解71%、文字語彙65%となった。1年間150時間というかけ足の授業だが、主専攻の学生は、ほぼ3級合格レベルに達したと言える。一方、副専攻等の学生は、文法読解54%、文字語彙58%という結果だった。主専攻の学生と比べると、日本語の学習に使える時間が少なくなりがちな副専攻等の学生は、3級合格レベルまでわずかに届かなかった。

本論文は、初級カリキュラムを変更するに至った背景、カリキュラムの概要、授業に対する学生の反応等について報告するとともに、カリキュラムを改善しようとする教師の意思決定の過程を記述すること、教師の意思決定の背景となった考え方について論じることを目的としている。

### 1. 初級カリキュラム変更の背景

2003年度現在、チェンマイ大学日本語科のカリキュラムは、概略、表1のとおりであった。

表1 チェンマイ大学人文学部日本語科カリキュラムの概略

| 4年次 2学期 |        | ゼミ |      | ガイドの日本語 | 翻訳  |
|---------|--------|----|------|---------|-----|
| 4年次 1学期 | 読解     | 文法 | 日本事情 | 会話      | 翻訳  |
| 3年次 2学期 | 読解・作文  | 文法 | 日本事情 | 会話      | 調査法 |
| 3年次 1学期 | 読解・作文  | 文法 | 日本事情 | 会話      |     |
| 2年次 2学期 | 読解・作文  |    | 聴解   | 会話      |     |
| 2年次 1学期 | 漢字     | 文法 | 聴解   | 会話      |     |
| 1年次 2学期 | 総合日本語Ⅱ |    |      |         |     |
| 1年次 1学期 | 総合日本語Ⅰ |    |      |         |     |

このカリキュラム全体を改定し、2005年6月から新カリキュラムが採用される予定である。新カリキュラム作成のために、現行カリキュラムの見直し作業をしていたところ、教師たちから学生の日本語力に関して、次のような問題点の指摘があった。

◇主専攻の学生の中に、2、3、4年生とも基礎的な文法が定着していない者が多い

◇4年生で2級合格が目標なのにもかかわらず、そのレベルに達する学生が少ない

◇4年生で卒業論文を書く時期になっても、日本語の文献を読んだり、論文を書いたりするのに必要な日本語力がついていない

そしてその原因として、初級のカリキュラムに問題があるというのが共通の意見だった。2002年度まで、初級の学習には3学期があてられていた。表1の「総合日本語Ⅰ」、「総合日本語Ⅱ」および2年次1学期の「文法」の授業である。主教材は『みんなの日本語初級』で、下記の進度で授業が行われていた。

1年次 1学期 (週5時間×15週＝75時間) 1課～14課 (14課分)

2学期 (週5時間×15週＝75時間) 15課～28課 (14課分)

2年次 1学期 (週3時間×15週＝45時間) 29課～50課 (22課分)

この初級のカリキュラムの問題点として教師たちから指摘があった点をあげる。まず、教科書『みんなの日本語初級』に関するものは、以下のような点だった。

◇文型以外の文法項目が「例文」で扱われるだけで、明示的でなく、学生に分かりにくい

◇「～場合」が一つの文型として扱われている（第45課）など、文型の提出の仕方が細かくて、時間がかかる

◇口頭運用能力の養成が主眼となっている教材なので、会話にすぐ使えるのはいいが、高度な読み書き能力の基礎を養うという観点からは注意すべき点がある。たとえば、「今日はテニスを楽しみません。天気が悪いからです」のような文型が、学習の初期に定着し、その文型を作文や論文にも使ってしまう学生が見受けられる

◇会話文で紹介されている日本事情的なことが細かくて、授業で扱うには重い

◇チェンマイ大学の学生には、あまり必要と思えない語彙が多い

スケジュールに関するものとして、次の問題点があげられた。

◇学生は、3ヶ月間の夏休みに既習事項を忘れる。しかし、復習がないまま2年生の授業が始まり、1課2時間という進度ですすむので、ついてこれない学生が増える。そして、そのまま2学期から中級の授業が始まるので、学生の負担が大きく、授業に時間がかかる

つまり、卒業時の到達目標から考えると、目標に合っていない学習項目や、ふさわしくない学習段階で学習されている項目があり、それだけ授業時間の点でも学生の負担という点でも無駄が出ている。その結果、細く弱い土台の上に4年分の大きな構造物を載せることになってしまい、無理が生じているのではないか、という反省だった。

これらの反省点をふまえた改善方法として、次の3つが考えられた。

①初級を2年にして、もっとゆっくり丁寧にすすめる

②今までどおり1年半にして、教科書を変えることで学生の負担を減らす

③教科書を変えて、初級を1年で終わらせ、2年次1学期を「初級の復習＋中級への橋渡し期間」として、基礎を固めなおす期間を設定する

①の方法では、4年生になった時に目指すレベルに達することがますます難しくなる。②の方法では、2年になった時に、十分な復習の時間がとれれば、問題はない。しかし、そうでなければ、夏休みに忘れたことを忘れたままで、さらに難しい文法事項を積み上げることになるという問題が解決できない。また、初級が終わった後の中級への移行がスムーズにいかないという問題も残る。4年間で積み上げようとする構造物の大きさが変わらないのであれば、教師が考えなければならない最も重要な点は、いかにして土台をより強固なものにするか、ということであろう。そこで、③の方法をとることが決まった。

## 2. 初級カリキュラム変更後の方針

### 2.1 1年次のカリキュラムについて

③の150時間で初級を終わらせるという方法で、今までどおり既習事項の100%の定着を目指すのは無理だと考え、次のような方針をたてた。

◇1年で日本語の基礎的な文法を「覚えこませる」とか「使えるようにする」のではなく、「全部紹介する」のだと考えて、100%の定着は求めない。文法事項や語彙を学生が見たとき、「よく分からないけど、習ったことがあるし、教科書を見れば、たぶんちゃんと思いつける」とか「文脈が与えられれば、理解できる」と言える程度でかまわないと考える

◇教科書や練習帳に出てくる語彙のうち、3級レベルのものを必修とし、それ以外は覚えなくてもいい、テストに出す場合はタイ語訳を与えると学生に伝える

また、学習意欲の維持や、学生の負担軽減のために次の3点を方針とした。

◇1年で3級の文法、語彙、漢字のおよそ85%を学習するという目標を学生に明確に示す

◇6月から授業を受けて、12月の能力試験実施時には4級合格レベルに十分達する。授業外で受験のための勉強をすれば3級合格も可能ということを示して、学生に意欲を持たせる

◇これまでは、教科書の「問題」の部分を宿題としていたが、問題そのものも全てノートに書き写させた上で、答えを書かせていた。そのような学生の負担を取り除き、より多くの時間を本当の意味での学習に使うために、宿題はすべて書き込み式にする

### 2.2 2年次のカリキュラムについて

チェンマイ大学のカリキュラムでは、表1のとおり、2年次から文法、聴解、会話、漢字と技能別にクラスが分かれる。1年半で初級を終わらせる従来のカリキュラムと1年で終わらせた場合の大きな違いは、学生が日本語の全体像を知った上で、技能別の授業を受けられる点である。どの科目も初

級の項目すべてを使って学習できるわけである。そこで、次の2点を方針とした。

- ◇これまでのような「20課の文法を使った会話」や「25課の文法が理解できているかどうか確認するための聞き取り」を練習するのではなく、より日本語の実像に近い、より自然なリソースを使って、学生の運用能力を高めることを目指す
- ◇既習項目で完全には定着していなかった部分に学生が自分で気づき、教科書を見直して思い出し、文脈の中での使われ方を知ることによって理解を深め、学習項目を定着させていけるような活動を配置する<sup>(3)</sup>。受容的な技能に関わる活動、産出的な技能に関わる活動、言語知識を増やすことを意図した活動のどの場合でもこの点を重視する

### 3. 新しく採用した初級教科書と教材

『みんなの日本語初級』に関して教師たちが感じていた問題を解決し、さらに1年間で終わらせるのにもっともふさわしい教科書はどれかと全員で検討を重ねた結果、『にほんご1・2・3』を採用することにした。この教科書は、1課で1つの文型を教えるようになっており、1課から123課までで構成されている。この教科書を選んだのは、以下のような理由からだった。

- ◇1課に1つの文型なので、その日に習った項目が学生に分かりやすい
- ◇授業で文型を扱うだけなら、120時間で終わらせることができるとされている
- ◇日本語能力試験3級出題基準の文法項目の84%がカバーされている<sup>(4)</sup>
- ◇曜日によって90分の授業と60分の授業があるスケジュールに合わせやすい
- ◇各課に必ず短い会話文があるが、日本だけでなくタイでもありそうな場面設定になっているので、日本事情的な情報が重くない
- ◇宿題にするのに適当な問題集があるし、テープもある
- ◇前年度まで使用の漢字教材をそのまま無理なく使える

教科書には、タイ語の文法説明と単語リストをつけた。単語リストには、必修のものとそうでないものを分ける印がついている。123課分の語彙を1冊にまとめた日タイ辞書も作った。

ほかに、練習帳は直接書き込んで、当日学習した課の分を翌日宿題として提出させることとした。漢字は、前年までと同様、『みんなの日本語初級Ⅰ漢字英語版』を使用することにした。さらに、教科書の進度に合わせて使える聴解と読解の教材も作り、聴解の練習は授業で使い、読解は宿題とした。また、学生の語彙学習の負担を考えて、ひらがな、かたかなの学習の際に教科書の17課までに出てくる語彙を文字とともに覚えられるように、かなの教材も改訂した。

### 4. 到達目標

1年間の到達目標は、「初級終了レベル」という設定だった。しかし、2章でも述べたとおり、「覚えこむ」とか「使えるようになる」ことまでは期待せず、初級の学習項目に関して、既習のものと未

習のものが識別でき、文脈の中で理解できればいいと考えていた。

日本語能力試験を受験したいという学生のニーズも高いので、日本語能力試験合格も到達目標の1つとすべきであろう。授業で扱う項目を、日本語能力試験3、4級の出題基準に照らしてみると、表2、3、4のとおりとなる。授業の進捗と能力試験の実施時期を考えると、6月から1学期が始まり、半年後の12月に行われる能力試験では、4級合格、その後も学習を続けた場合は、翌年に3級合格を目標とした。

表2 日本語能力試験出題基準に占める指導項目の割合（文法・文型）

|             | 1学期に学習    | 2学期に学習   | 教科書にない   |
|-------------|-----------|----------|----------|
| 4級の文法項目128個 | 103個(80%) | 17個(13%) | 8個(7%)   |
| 3級の文法項目123個 | 25個(20%)  | 79個(64%) | 19個(16%) |

表3 日本語能力試験出題基準に占める指導項目の割合（語彙）

|                             | 1学期に学習      | 1+2学期        | 教科書にない      |
|-----------------------------|-------------|--------------|-------------|
| 4級の語彙729個                   | 608個(83.4%) |              | 41個(5.6%)   |
| 3級の語彙1405個<br>(4級729+新出676) |             | 1203個(85.6%) | 202個(14.4%) |

表4 日本語能力試験出題基準に占める指導項目の割合（漢字）

|                            | 1学期に学習<br>Unit 1～10 | 1+2学期<br>Unit 11～20, 24, 25 | 教科書にない    |
|----------------------------|---------------------|-----------------------------|-----------|
| 4級の漢字103個                  | 83個(80.6%)          |                             | 2個(2%)空・耳 |
| 3級の漢字283個<br>(4級103+新出180) |                     | 230個(81.3%)                 | 51個(18%)  |

## 5. 授業の進め方

3章で述べたとおり、教科書は123課からなっている。1学期には60課まで、2学期には61課から123課までを終わらせることとした。授業は、通常1週間5課のペースで進めた。表5は、ある1週間の授業の進め方の例である。

1週間の授業は月～木曜日まで4日間、合計5時間があてられる。月水の90分授業をタイ人教師が担当し、火木の60分授業を日本人教師が担当した。月火水は前日の復習、語彙の導入、文型の導入と練習、漢字の導入が行われる。その日の学習項目に応じて、適当な会話の練習も取り入れられる。漢字は、モデルを見ながら正しい筆順で書けるようになることだけを目標とする。

木曜日は、聴解練習と漢字の学習が行われる。聴解練習では、その週に勉強した文型を使った練習をするので、文型の復習も兼ねている。漢字は、その週に練習した書き方を復習するとともに、単語としての意味、読み方、文の中での使われ方などを勉強する。この段階では、ひらがなで書かれた単語を漢字で書けるようになることが目標となる。

表5 スケジュールの例

|          | 11月10日<br>月曜日   | 11月11日<br>火曜日  | 11月12日<br>水曜日   | 11月13日<br>木曜日                           |
|----------|-----------------|----------------|-----------------|-----------------------------------------|
|          | 90分             | 60分            | 90分             | 60分                                     |
| 担当       | タイ人             | 日本人            | タイ人             | 日本人                                     |
| 課        | 76、78           | 77、(79)        | 79、80           | 聴解：76~80課の文法・文型<br>を使った練習<br>漢字：Unit 12 |
| 文法<br>文型 | と言いました<br>と思います | 可能形<br>(命令形)   | 命令形<br>～てしまいました |                                         |
| 漢字       | 明、暗             | 広、多、少          | 長、短             |                                         |
| 小<br>テスト | 先週の文法の<br>小テスト  | 先週の漢字の<br>小テスト |                 |                                         |

## 6. カリキュラムの変更についての教師の振り返り

まず、1学期が始まって、2ヵ月後に行った検討会議では、次のような意見が出た。

◇前年度までと比べて、進度にそれほど無理があるとは思えない

◇前日の復習としてQAをしたり、会話の練習を盛り込んだりするなど、各自が口頭運用能力の養成のための工夫をしよう

◇準備したリソースが十分に活用されていない。分からない単語があると、教科書をめくって前の課の語彙リストを探している学生が見受けられるので、辞書の使い方を再度説明して、有効に利用できるようにしよう

◇教師にとって宿題のチェックの負担が重い

これらの意見から、2学期も進度を遅くすることはせず、予定どおり残りの63課を終わらせることを決めた。そして、口頭運用能力の養成や、教材の有効活用については、それぞれのクラスの担当者が授業で意識して工夫することに決まった。宿題については、教師はたいへんでも、効果があると考えて、続けることにした。

次に、2学期が終わった後の検討会では、次のような意見が出た。

◇例年に比べて、1学期にドロップ<sup>(5)</sup>した学生が多かった

◇副専攻等のクラスでは、前年度よりよくできていると感じられた。これは、1学期にドロップした人が多く、本当にやる気のある学生だけが残ったためではないか

◇1学期にはそれほど感じられなかった主専攻とそれ以外の差が大きくなった。これは、副専攻等の学生にとって2学期の方が専門の勉強が忙しくなるせいだろう

◇自己学習に取り組みやすい漢字は、どのクラスの学生もよくできていて、1年に230個の漢字を勉強するという目標に無理はない

◇やはり、教師にとって宿題のチェックの負担が重い

## 7. 学生の反応

次に、ドロップした学生数の調査と学生に対するアンケートの結果から、この授業の進め方に対する学生の反応を見ていく。アンケート（資料1、2参照）は、無記名とし、1学期、2学期とも期末試験の当日、試験の後に行い、全員から回収した。

### 7.1 ドロップした学生の率とその理由

表6は、登録者数とそこに占めるドロップした学生の割合を示している。

表6 ドロップした学生の人数と登録者数に占める割合

|            |     | 登録者数 |     | ドロップした学生の数と割合 |          |     |
|------------|-----|------|-----|---------------|----------|-----|
|            |     | 主専攻  | 副専攻 | 主専攻           | 副専攻      | 全体  |
| 2002<br>年度 | 1学期 | 26人  | 93人 | 0人            | 16人(13%) | 13% |
|            | 2学期 | 26人  | 51人 | 0人            | 4人(5%)   | 5%  |
| 2003<br>年度 | 1学期 | 25人  | 79人 | 2人(8%)        | 24人(30%) | 25% |
|            | 2学期 | 23人  | 39人 | 3人(13%)       | 2人(5%)   | 8%  |

検討会での教師の振り返りでも述べられていたとおり、1学期は登録者数の25%にあたる26人がドロップした。2002年と比べると、10人、12%増である。

ドロップの手続きには、教師のサインが必要で、その際、ドロップの理由を尋ねることになっている。しかし、教師に面と向かって授業に対する不満を述べる学生は少ないだろうと考え、残った学生に友人のドロップの理由を聞いてみることにした（資料1、質問5参照）。そこでの答えは、下記の3つがほとんどで、教師が直接聞き取った内容とも一致していた。

- ① C, Dなど悪い成績をとりたくない
- ② 自分の専門の科目が忙しい
- ③ 宿題が多すぎる

表7は、所属学部別の登録者数に対するドロップした学生の割合を示したものである。

表7 2003年度1学期の登録者数に占める学部別ドロップ率

| 経済 | 経営  | 人文  | 社会  | 理学  | 工学  | 教育<br>Agro-Industry | 芸術  | 農学  |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|---------------------|-----|-----|
| 0% | 17% | 20% | 22% | 31% | 33% | 40%                 | 50% | 67% |

この表を見ると、日本語の教室に来るための移動距離が長い学部ほどドロップ率が高くなっていることが分かる。徒歩圏内は、ドロップ率31%の理学部まで。農学部と日本語の教室は、広大なチェンマイ大学キャンパスの両端に位置する。アンケートには現れていないが、教室まで行き来するための距離もドロップの理由の1つになっている可能性がある。

## 7.2 日本語能力試験3級レベルという学習内容の設定に対する学生の意見

1学期も2学期も日本語の最初の授業で、表2、3、4のタイ語版を学生に配布し、1年間の学習内容が、日本語能力試験3級の出題基準の80～85%をカバーすることを説明している。

そこで、2学期末のアンケートでは、1年間の学習内容の設定や進捗について学生の意見を聞いてみた（資料2、質問4参照）。自由記述方式の回答から意見を1つ1つ抽出したところ、下のような結果になった。「学習項目が多くてたいへんだが、3級の範囲をカバーするという目標はよい」というように、1人の学生の記述の中に、肯定的、否定的、両方の意見が書かれたものも多く見られた。回答者は、主専攻（「主」と略記）20人、副専攻等（「副」と略記）34人である。

### A 肯定的な意見

A-1 学習項目の量、内容についての言及・・・・・・・・・・主7人、副18人

（例：内容が多くていい。日常生活に使える。分かりやすい。すぐ使える）

A-2 進捗についての言及・・・・・・・・・・主4人、副1人

（例：この進捗でいい。遅かったらつまらない。速く進んだから、来年幅広く勉強できる）

A-3 1年間の学習結果に対する満足度についての言及・・・・・・・・主1人、副2人

（例：日本語の四技能を身につけられた。3級に合格できた。勉強してよかった）

A-4 カリキュラムのその他の点に関する言及・・・・・・・・・・主1人、副2人

（例：試験範囲が中間と期末で半分半分だから、問題ない。教え方もいいし、教科書もいい）

### B 否定的な意見

B-1 学習項目の量、内容についての言及・・・・・・・・・・主12人、副17人

（例：内容が多すぎる。練習が少ない。日常生活には使えない。文法が難しい）

B-2 授業の進捗についての言及・・・・・・・・・・主6人、副12人

（例：速い。時間が足りない。3学期かけてやったほうがいい。未習者にはついていけない）

B-3 自分の学習の管理についての言及・・・・・・・・・・主1人、副7人

（例：復習に時間がかかる。すぐ忘れてしまう。ほかの科目が勉強できなくなる）

B-4 カリキュラムのその他の点に関する言及・・・・・・・・・・主0人、副5人

（例：宿題が多い。テストが多い。学生が受身な授業なので、双方向の授業スタイルにしてほしい。教科書のタイ語の部分にミスがある。文型の並べ方を変えた方がいい）

## 7.3 1年間の学習を通じた気持ちの変化

2学期末のアンケートでは、1年間の学習を通じた気持ちの変化についての質問も加えた（資料2、質問5参照）。これも自由記述とし、1年間の学習を終えた時点で肯定的な感情を持てたか、否定的な感情を持っているかをみた。回答者は、主専攻18人、副専攻等34人である。

A 肯定的な感情についての言及・・・・・・・・・・主13人、副18人

例：最初はくじけそうになって、ドロップも考えたけど、頑張ったら楽しくなった（主）

勉強している時は大変だったが、今は、日本語が話せるようになったので、うれしい（主）

1学期は楽しかった。2学期はかなり難しくなったが、今でも日本語が好き（副）

日本人と日本語で話す勇気が出た（副）

B 否定的な感情についての言及・・・・・・・・・・主1人、副9人

例：最初はよかったが、今は疲れている（主）

1学期の勉強は好きだったが、2学期は好きになれなかった（副）

内容が多く、進度が速かったから大変だった。2学期は1学期ほど楽しくなかった（副）

C どちらともとれるもの・・・・・・・・・・主4人、副7人

例：勉強すればするほどたいへんになるから、頑張りたい（主）

これ以上難しい科目はない。簡単に見えるのに、全部ままとると分からなくなる。全体的にはおもしろい。いろいろ勉強になった（副）

## 7.4 能力についての満足度

やはり2学期末のアンケートでは、1年間学習した成果として、自分の能力を学生がどう感じているのかを調べた（資料2、質問3参照）。技能別（読む、漢字、文法、聞く、話す）に自分の能力に対する満足度をパーセントであらわしてもらい、平均をとった。満足度の高いものから順に、1位：読む 52.7%、2位：漢字 51.0%、3位：文法 46.9%、4位：聞く 38.9%、5位：話す 36.8%という結果になった。

## 8. 学生の到達度

次に、1年間の授業を終えた時点の学生の到達度を見たい。

表8は、2学期の期末テストの結果（平均点）である。定期テストは各学期とも中間と期末の2回行われ、毎回5科目、2日にわたって5時間かけて実施される。

表8 2学期の期末テストの結果（平均点）

|          | 文法   | 翻訳   | 漢字   | 聴解   | 読解   | 合計   |
|----------|------|------|------|------|------|------|
| 主専攻20名   | 73.3 | 83.7 | 95.2 | 73.2 | 81.4 | 80.4 |
| 副専攻ほか34名 | 60.7 | 66.2 | 88.7 | 62.5 | 69.9 | 68.9 |

どの科目でも主専攻がそれ以外を上回る結果となった。特に、翻訳は17点、文法13点の差が出た。順位で見ると、上位10人のうち7人が主専攻だった。

次に、最終の授業時に行った日本語能力試験3級のレベルチェック・テストの結果（平均点）が表9である。「はじめに」で述べたとおり、市販以前のテストを使用したので、聴解のテープは手に入られず実施できなかった。

表9 日本語能力試験3級レベルチェックの結果（平均点）

|       | 文法読解  | 文字語彙 |
|-------|-------|------|
| 主専攻   | 143.0 | 64.8 |
| 副専攻ほか | 107.2 | 58.2 |

最後に、2003年12月の日本語能力試験の結果は、表10のとおりであった。副専攻等の学生で12人の4級申込者に対して7人合格というのは、少ないように思われるが、受験しなかった者も含まれるのでこのような結果になっている。受験者の正確な人数は不明である。

表10 2003年12月の日本語能力試験の結果

|      | 2学期<br>終了者数 | 4級  |     | 3級  |     |
|------|-------------|-----|-----|-----|-----|
|      |             | 申込者 | 合格者 | 申込者 | 合格者 |
| 主専攻  | 20人         | 13人 | 13人 | 2人  | 1人  |
| 副専攻等 | 37人         | 12人 | 7人  | 1人  | 1人  |

## 9. 2004年度に向けた初級カリキュラムの改定方針

以上、2003年度の実践を通じた学生の反応と到達度を見てきた。それらをふまえ、また、卒業までに目標を達成できるかどうかという観点から、主専攻課程は、2004年度も2003年度と同じく1年で初級を終わらせることに決まった。しかし、副専攻等については、2004年度は過渡的な措置として、学習項目を主専攻の4分の3に減らし、91課までとすることになった。さらに、2005年度から採用予定の新カリキュラムでは、主専攻と副専攻等のカリキュラムを完全に分けることになった。同じ内容を、主専攻は1年2科目（150時間）で、副専攻等は2年間かけて、4科目（180時間）で終わらせることが決まった。

## 10. カリキュラム作成の背景となった考え方

前章までに記述した教師による振り返りや意思決定の過程は、チェンマイ大学で初級の授業に関わっている教師全体で共有されているものであった。本章では、本論文で報告した初級カリキュラム作成の背景となった筆者の考え方について論じる。

### 10.1 時間設定について

木村（1982）は、「一般に初級といわれるのは、学習の開始から約200～300時間の授業時数をかけて行われる学習段階である。機関によっては、もっと少ない時間数の、短い期間を初級としてい

る場合もあるが、一般にいわゆる「初級レベル」の学習目標に到達するには、300時間を必要とする。

初級の学習目標は、音声・文字両面にわたる学習の基礎的能力を修めることである。すなわち、日本語を聞くこと、話すことによって、日常生活の簡単な内容について、意思の疎通を行う能力と、その内容を文字によって表したものを読んで理解することと自らも文字によって表現する能力を得ることである」(p.633)と述べている。また、1984年に始まった日本語能力試験の出題基準でも現在まで一貫して、300時間程度の学習が初級を修了したレベルとされている。

上のような立場からすると、今回のチェンマイ大学での試みは、「『初級レベル』の学習目標に到達」(木村：前掲書)しないカリキュラムということになる。

しかし、300時間という基準は、何をもとに作られたのだろうか。この基準の設定方法に関する資料を入手できなかったのですが、あくまでも私見だが、当時の日本語教育において直接法を用いて行われる授業がオーソドクシーとなっていた(西口1995:2)という背景があるものと思われる。

媒介語を使用した授業に比べると、直接法はより時間がかかることが指摘されている(川本1992:32-33)。5章で述べたとおり、チェンマイ大学では、タイ人と日本人の教員がチームで授業を行っている。直接法と間接法の折衷で、両者の長所を生かす方法がとられており、完全に直接法で授業をした場合よりも時間の短縮が図れることになる。

ほかに、「本冊のみ使用の場合は120時間程度」(寺内ほか1996:6)の学習時間を想定した教科書を採用していることも150時間というカリキュラムを可能にしている理由だろう。この教科書では、「練習帳や読み教材を併せて使った場合は300～350時間」(p.6)が目安とされているが、チェンマイ大学では練習帳と読解練習は宿題にすることによっても、授業時間が短縮されている。宿題の提出率は各学期とも90%を超えており、これは注目されるべき学習者特性だと言える。宿題は、すべて教師がチェックし、誤りがあれば、媒介語による解説を書き加えたり、授業であらためて説明をしたりしている。

カリキュラム作成者に求められるべきは、外在的な基準に準拠することではなく、学習者特性や、媒介語使用の可否といったその機関独自のメリットを十分に生かすことだと考える。

## 10.2 進捗と学習項目の定着について

前節で引用した木村(1982)は、「初級の学習目標は、音声・文字両面にわたる学習の基礎的能力を修めること」であり、その目標の到達に300時間の授業時数が必要だとしている(p.633)。しかし、300時間授業を受ければ、「能力を修めること」ができるのだろうか。もとより、クラスの成員間には差があり、クラス内の学習者が一様に学習目標に到達することはまれである。また、何百時間かけようと、教えてできるようになることもあれば、教えたのにできないこともある。

青木(2001)は、『教えたのにできない』とか『教わったけれど忘れた』とか言っている人たちは、「教える」という言葉を、おそらく『言う』とか『見せる』とかいう意味で使っているのだと思われ

ます」(p.188)と指摘している。筆者自身が行っている初級の授業を考えても、教えているつもりで、実は、言ったり見せたりしているだけと思われる面が多分にある。

それならば、発想を逆転させて、「教師が教えようと計画したもの（あるいは、言ったり見せたりしたもの）すべてが、学習者全員に、しかも一様に定着することなどありえない」という学習者観にたったカリキュラムを組み立てることこそ必要なのではないかと考えたわけである。

続く2年次の授業の方針は、2.2で述べたが、そこでは、学生一人一人の学習目的、興味、学習特性を生かした、個性的な学びが可能になる方法を模索したいと考えている。学生が「今言いたいこと」が言えるようになることが目指され、教師は「それはまだ習っていないから言えません」と言わない。学生が「今読みたいもの」が教室に持ち込まれたり、「今聞きたいもの」が学習のリソースとなるような授業の中で、既習事項の定着をはかることを目指す。

## 11. 学生の反応と到達度についての考察

前章で、カリキュラム作成の背景となった考え方について述べたが、本章では、それを実践にうつした結果について考察したい。

まず、到達度について、授業で取り上げた学習項目が、日本語能力試験3級の文法事項の84%、語彙85%、漢字81%だったことを考えると、副専攻等の学生でも3級試験で50%以上の得点ができただのは満足すべき結果と見ている。

次に、7.4でみた自己の能力の満足度について、漢字の満足度が最も高いだろうというのが筆者の予想だった。学習の目標設定が容易で、自己学習に取り組みやすく、テストの結果もよかったからだ。しかし、予想に反し、満足度が最も高かったのは読むことだった。「読む」ということを学生が「読解」ととらえたか、ただ文字を目で追って音に変換するレベルで考えたのかは分からない。しかし、筆者は、この結果には読解のテストの作り方が関わっていると考えている。授業では読解の時間が全くなく、宿題のみだったにもかかわらず、テストでは毎回、A4用紙2枚を越える長文を出している。これは、単独では分からない単語や文法項目でも「文脈が与えられれば理解できる」ことを実感してほしいという思いからだった。アンケートの実施がテストの直後だったこと、副専攻等のテストの結果が漢字に次いでよかったことを考えると、これだけの長文が理解できたという満足感がこのアンケート結果の1つの要因ではないかと推測している。

その一方で、アンケートの「内容が多すぎる」「すぐ忘れてしまう」などの回答は、「100%の定着は求めない」という教師側の方針が、学生にうまく伝えられなかったことの現われだろう。原因は、2年次のカリキュラムが学生に伝えられていなかったこと、テストの作り方、評価の方法の3つが考えられる。文法や翻訳のテストは「100%の定着は求めない」という方針や、「文脈が与えられれば理解できる」という当初の学習目標をはるかに超える内容となっていたし、日本語を学習している学生

全部を相対的に順位づけて評価するというシステムは、この方針とまったくかみあっていなかった。この点は、評価基準や定期試験の問題の見直しという形で、今後、検討していかなければならない。

進度についての学生の意見をどう見るかは、難しい問題である。なぜなら、「速い」「もっとゆっくり」という意見は、カリキュラム変更以前から常にあったからだ。しかし、ドロップした学生の増加を考えると、例年以上に学生の負担が大きかったことは確かだろう。カリキュラム変更以前に学生にとって最もたいへんだったのは、2年次1学期だった。そして、副専攻等の学生で2年次に文法を勉強するのは、本当に高い動機を持つ学生に限られていた。しかし、2003年度の場合、そうした高い動機を持つ学生にも、少し日本語にふれてみたいといった動機の学生にも1つの選択肢しか与えられなかったことが問題だと考える。2004年度は、副専攻等の進度を遅くすることが決まったが、2005年のカリキュラム全面改定の際には、副専攻等の学生向けに幅広い選択肢を用意することによって、さまざまな学生が自分らしく日本語を学べる環境を整えたい。

## おわりに

初級の学習項目というのは、「日本語全体の見取り図」にたとえられるだろう。そのおおまかな見取り図を1年で見せようとするのが、ここで報告したカリキュラムである。その見取り図を手にした学生が、より个性的に日本語を学び、日本語を使って、より自分らしくコミュニケーションできるようになるためには、2年次のカリキュラムが重要となる。現在、リソースの開発とシラバスの作成を進めているところである。

1年次のカリキュラムについても、2年次についても、今後、本論文の枠組みにしたがってデータを集め、それらを評価しながら、カリキュラム改善のための試行錯誤を続けていきたい。

## 注

- 1：学生は、2年生になったら、選択あるいは副専攻の科目を履修できる。日本語を選ぶことができるかどうかは、学生が所属する学部、学科によって異なる。いずれの科目も3科目9単位を取得すると、選択科目として修めたことが認定される。さらにもう2科目、合計5科目15単位を取得すると、副専攻として認定される。学生は、まず学習を始めてみて、それから選択科目で終えるか、副専攻として認定されるまで学習を続けるかを選ぶことができるシステムになっている。
- 2：レベルチェックの実施は2004年2月11、12日の両日。学期最後の授業時間を使った。問題は、2003年12月実施のものを使用した。市販以前のもので、チェンマイ大学の学生にとっては、初めて見るものだった。ただし、レベルチェックの受験者のうち、3名は2003年12月の日本語能力試験で3級を受験していたので、その3名にとっては、2回目のテストということになった。
- 3：この点に関しては、小林(2001)が参考になる。
- 4：教科書『にほんご1・2・3』で取り上げられていない文法項目とは、以下のようなもので、その他の初級日本語教材でもあまり扱われていない項目であろうと思われる。  
もう＋否定：もうお金がありません                      まだ＋肯定：まだ時間があります  
～ということ：彼が元気になったということを知って安心しました  
終助詞：だい？    かい？                      らしい：あの人は男らしい人です
- 5：ドロップというのは、学生が学期の途中で受講の登録を取り消すことをいう。そうすることで、その科目の単位はとれなくなるが、学生にとっては、悪い成績を残してGPAを下げないですむというメリットがある。

## 引用文献

青木直子(2001)「第1章教師の役割」『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社 182-197

川本喬(1992)「ケース4直接法」『ケーススタディ日本語教育』おうふう 30-36

木村宗男(1982)「初級レベルの学習目標」『日本語教育事典』大修館書店 633

小林典子(2001)「第9章文法の習得とカリキュラム」『日本語学習者の文法習得』大修館書店  
159-176

寺内久仁子、白井香織、草刈めぐみ(1996)『にほんご1・2・3』アルク

西口光一(1995)『日本語教授法を理解する本：歴史と理論編』バベル・プレス

資料：紙幅の都合で、本文中で言及されていない質問については、選択肢を削除した

資料1 1学期末のアンケート

## แบบสอบถามความคิดเห็นของนักศึกษาที่เรียนกระบวนวิชา 018-103

แบบสอบถามชุดนี้ จัดทำขึ้นเพื่อสำรวจความคิดเห็นของนักศึกษาที่เรียนภาษาญี่ปุ่นขั้นต้น 1 (018-103) มิได้มีจุดประสงค์อื่นใดทั้งสิ้น และคำตอบของท่านจะเป็นประโยชน์ต่อการจัดการเรียนการสอน ตลอดจนการปรับปรุงการเรียนการสอนวิชานี้ในคราวต่อไป จึงใคร่ขอความร่วมมือตอบแบบสอบถามนี้ตามความเป็นจริง นักศึกษาชั้นปีที่.....วิชาเอก.....วิชาโท.....

1. เหตุผลที่เรียนวิชานี้
2. คุณสมัครสอบวัดระดับความรู้ภาษาญี่ปุ่นแล้วหรือยัง
3. ในขณะที่คุณเรียนภาษาญี่ปุ่นในมหาวิทยาลัยตั้งแต่เปิดเทอมมา คุณได้เรียนภาษาญี่ปุ่นที่อื่นด้วยหรือไม่
4. ก่อนที่คุณจะเรียนวิชานี้ คุณเคยเรียนภาษาญี่ปุ่นมาก่อนหรือไม่
5. คุณพอจะทราบสาเหตุที่เพื่อนของคุณเลิกเรียนวิชานี้ว่าเป็นเพราะเหตุใด (ตอบได้มากกว่า 1 ข้อ)  
ก. การบ้านมากเกินไป ข. ไม่ชอบภาษาญี่ปุ่น ค. การเรียนการสอนไม่น่าสนใจ ง. วิชาเอกมีงานมาก  
จ. ไม่อยากได้เกรดไม่ดี ฉ. วิชานี้ไม่เป็นประโยชน์ ช. อื่นๆ (โปรดระบุ).....
6. ข้อคิดเห็นหรือข้อเสนอแนะอื่นๆต่อการเรียนการสอนวิชานี้

## แบบสอบถามความคิดเห็นของนักศึกษาที่เรียนกระบวนวิชา 018-104

แบบสอบถามชุดนี้ จัดทำขึ้นเพื่อสำรวจความคิดเห็นของนักศึกษาที่เรียนภาษาญี่ปุ่นขั้นต้น 2 (018-104) มิได้มีจุดประสงค์อื่นใดทั้งสิ้น และคำตอบของท่านจะเป็นประโยชน์ต่อการจัดการเรียนการสอน ตลอดจนการปรับปรุงการเรียนการสอนวิชานี้ในคราวต่อไป จึงใคร่ขอความร่วมมือตอบแบบสอบถามนี้ตามความเป็นจริง

นักศึกษาชั้นปีที่.....คณะ.....วิชาเอก.....วิชาโท.....

1. เหตุผลที่เรียนวิชา 018-104

2. คุณได้เข้าสอบวัดระดับความรู้ภาษาญี่ปุ่นที่ผ่านมาหรือไม่

3. จนถึงปัจจุบันคุณคิดว่าภาษาญี่ปุ่นของคุณได้พัฒนามากแค่ไหน หรือคุณมีความพึงพอใจในภาษาญี่ปุ่นของคุณมากน้อยแค่ไหน

การพูด 0% ..... 20% ..... 40% ..... 60% ..... 80% ..... 100%

การฟัง 0% ..... 20% ..... 40% ..... 60% ..... 80% ..... 100%

การอ่าน 0% ..... 20% ..... 40% ..... 60% ..... 80% ..... 100%

ไวยากรณ์ 0% ..... 20% ..... 40% ..... 60% ..... 80% ..... 100%

คันจิ 0% ..... 20% ..... 40% ..... 60% ..... 80% ..... 100%

4. เป้าหมายในการเรียนของเราคือ ภายใน 1 ปี เรียนได้ครอบคลุมความรู้ภาษาญี่ปุ่นระดับ 3 ในการตั้งเป้าหมายไว้ดังกล่าว คุณมีความคิดเห็นอย่างไรบ้าง (แสดงความคิดเห็นได้โดยอิสระ)

ตัวอย่างการตอบ - เนื้อหามากแต่ได้เรียนรู้ดีมาก

- อยากสอบผ่านระดับ 3 แต่ถ้าเรียนอย่างช้าๆ อีกหน่อยก็จะดี

- ได้เรียนรู้ไวยากรณ์มากดี แต่คำศัพท์มากเกินไป เป็นต้น

5. ความรู้สึกตอนเริ่มแรกที่เรียนภาษาญี่ปุ่นหรือระหว่างที่เรียนภาษาญี่ปุ่นกับความรู้สึกเมื่อเรียนจบ 018-104 แล้ว คุณมีความรู้สึกเหมือนหรือแตกต่างกันอย่างไร (แสดงความคิดเห็นได้โดยอิสระ)

ตัวอย่างการตอบ - เรียนตอนแรกรู้สึกชอบภาษาญี่ปุ่นแต่พอเรียนจบแล้วรู้สึกไม่ชอบ

- เรียนตอนแรกรู้สึกไม่ชอบภาษาญี่ปุ่นแต่เรียนจบแล้วรู้สึกชอบ

- ตอนแรกรู้สึกเหนื่อยกับการเรียน แต่เรียนจบแล้วรู้สึกดี (เช่นสามารถใช้ภาษาญี่ปุ่นในการพูดคุยกับเพื่อนอาจารย์หรือกับชาวญี่ปุ่นได้) เป็นต้น

6. ต่อจากนี้ไป คุณตั้งใจจะเรียนภาษาญี่ปุ่นต่อไปหรือไม่

7. ข้อคิดเห็นหรือข้อเสนอแนะอื่นๆต่อการเรียนการสอนวิชานี้